学習者のための中級日本語教育文法の在り方

―中級文法クラスのアンケート調査と アチーブメントテスト結果の比較を通して―

許　明子　　宮崎　恵子　　青木　幸子

要　旨

本研究は中級レベルにおける日本語教育文法の在り方を探るため、学習者の意識とアチーブメントテストの結果を比較し、考察したものである。中級レベルで学ぶ文法項目に関する学習者の内省とテスト結果に現れた各課の目標達成度について比較し考察を行った。その結果、中級レベルで文法を学んでいる学習者は、既習項目であったり、混同が多い項目であっても、学習者自身が学びたいと思っている項目については面白いと感じ、授業に対する満足度が高く、積極的に取り組んでいたことが分かった。また、簡単だと思っている項目であっても結果が伴わなかったり、難しいと感じていても実際にはできていたりする項目があることから、学習者の内省と到達度の間にはギャップが存在していることが分かった。このようなギャップを把握し、多少難しい学習項目であっても、学習者のニーズを的確に捉え、それに合った学習内容を提示することによって、学習者は興味を持って取り組めるようになると思われる。

【キーワード】中級日本語教育文法　学習者ニーズ　アチーブメントテスト　運用力

Towards an Ideal Japanese Pedagogical Grammar for Intermediate Japanese Learners

HEO Myeongja, MIYAZAKI Keiko, AOKI Sachiko

【Abstract】The purpose of this study is to explore the nature of Japanese language education in intermediate level grammar classes. In order to do so, we consider learner introspection in regard to intermediate-level grammar items in comparison with their levels of goal achievement, as measured by an achievement test. The results indicate that learners of intermediate Japanese maintain high levels of interest, satisfaction, and active engagement when grammatical items that they want to learn are being covered―regardless of whether or not the items are review, or easily confused with similar items. In addition, there seems to be a gap between learner introspection and actual achievement. We believe that by developing an accurate understanding of the gap, and presenting grammar contents appropriate to the needs of learners, it is possible to help learners maintain interest and active engagement in learning intermediate Japanese grammar.

【Keywords】intermediate Japanese pedagogical grammar, learner needs, achievement test, proficiency

１．はじめに

本研究は、中級レベルの学習者を対象に、日本語の運用力を向上させるための文法教育の在り方について提案するものである。その手がかりとして、学習者自身の文法項目に対する理解度について調べたアンケートの結果とコース修了時に実施したアチーブメントテストの結果を比較分析し、考察を行う。

中級レベルは初級レベルとは異なるさまざまな問題がある。新井・平田（2001）、佐藤（2000）、中村（1999）等では、レベル定義のあいまいさ、主教材の幅広さ、コースデザインの難しさについて指摘している。また、中級で学ぶ学習者自身の意識について、大木（1994）、長野他（2003）、新井他（2006）は、ゼロ初級以外の学生はほとんど中級レベルだと認識していると指摘している。中級レベルで学んでいる学習者のニーズや学習者自身の内省、中級文法クラスに対する学習者の意識については、許・鶴町（2009）において詳しく分析されている。許・鶴町には、学習者は正確な理解や産出能力の向上より、新しい文型や語彙を習いたいという意識が強いと述べられている。そのようなニーズがある一方で、日本語を正確に使い分けられるようになりたい、コミュニケーション能力を向上させたいという意識も持っており、学習者自身も中級レベルの難しさを実感し、予習、復習、新出語彙を調べたり等さまざまな方法で学習に臨んでいると報告されている。

近年、コミュニケーション能力を育成するための研究や、日本語教育文法に関する研究の重要性が提唱されている（野田2005、野田2012）。日本語を学んで、日本語によってコミュニケーション活動を行うことは当たり前の目標とも言えるが、たやすく達成できるものではない。その目標を実現させるためには、まず、実際の教育現場でどのような教育が行われているか、学習者はその教育をどのようにとらえているかについて十分に考察する必要がある。

本研究では、一つの手がかりとして、筆者らが2012年度１学期に担当した中級文法クラス[1]の実践を通して、学習目標、授業活動、学習者自身の内省、アチーブメントテストの結果を比較することによって、学習者のコミュニケーション能力を向上させるための、文法教育の在り方について考察を行う。中級レベルで取り上げている文法項目について学習者の意識とテスト結果の分析を通して、使えるようになるための有効な文法教育について検討する。

２．中級初期レベル文法J511

初級レベルが修了し、中級レベルにプレースされた45名が対象となる。中級レベルで使用している教科書は本機関で開発した『中級実用日本語文法（改訂版）』[2]である。中級初期レベルの文法クラスの授業アンケートおよび期末テストの結果分析を通して、中級レベルに存在している問題点について検討する。

2.1　学習者の意識

中級文法クラスでは、学習者がそれぞれの文法項目にどのような感想を持っているのかを知るために、学習者にアンケート調査を行っている。このアンケートは毎学期、学期修了時に行っているもので、今までにも過去2年分の結果があるが[3]、今回、テキストの内容を改訂したことから、2012年度1学期のものだけを取り上げる。なお、アンケートの内容および実施方法等はJ511、J611、J711で共通している。

学習した項目について、難しいと感じる課と簡単だったと感じる課にはばらつきがあったが、面白かった課はすべての学習項目がほとんど均等な割合として現れており、簡単だと思う学習項目であっても高い学習意欲を持続することができたことがうかがえる。学習項目に対する学習者の内省結果は以下の表1の通りである。

表1　J511の学習項目に対する学習者の意識

学習項目	難しかった課	簡単だった課	面白かった課
L1　指示語	11（ 8%）	22 (17%)	13 (10%)
L2　助詞	10（ 8%）	26 (21%)	13 (10%)
L3　複合助詞	23 (18%)	8（ 6%）	17 (13%)
L4　の・こと・もの	13 (10%)	21 (17%)	18 (13%)
L5　原因・理由	19 (14%)	10（ 8%）	13 (10%)
L6　目的・可能・願望	21 (16%)	8（ 6%）	21 (16%)
L7　いく・くる	10（ 8%）	22 (17%)	17 (13%)
L8　する・なる	24 (18%)	10（ 8%）	20 (15%)

数字は回答者数、（　）は%

J511で取り上げている学習項目はほとんど初級レベルでも学習した項目であり、一見、繰り返しのように見える。しかし、各課に対する難易度の感じ方は学習者によって違いはあるものの、学習者はすべての学習項目に対して万遍なく面白いと感じており、興味を持って取り組んでいたことが分かる。難しいと感じた課と簡単だと感じた課はほぼ逆転しているが、書き言葉に多く使われる3課の「複合助詞」、語用的特徴が含まれている6課の「目的・可能・願望」、日本語の基本概念とバリエーションの理解が必要な8課の「する・なる」の学習項目は難しかったと答えている。

しかし、これらの学習項目も含めてすべてに面白かったと答えた学習者が多いことから、学習者は難しいと感じる学習項目であっても、学習の必要性を感じる内容については興味を持って学んでいることが分かる。中級レベルの学習者は初級レベルで学んだ学習項目の繰り返しよりも新しい項目の学習に意欲を示す傾向があることは前述した通りであるが、既習項目であっても学習者のニーズに合った内容や活動には興味を持って取り組んでいた

ことが分かる。

本教材では、各学習項目の基本的な意味、用法、使い方、他の表現との違い等について詳細に説明されており、日本における日常生活で使われやすい例文が多く示されている。学習者は教科書およびMoodleを利用して予習・復習を行っており、それが自律学習につながっている。教室では学習者の理解度や定着を確認し、文作りを通して運用力の向上を目指す活動を取り入れている。

ここで注目したいのは、初級レベルで学習して「簡単だ」と感じている項目であっても「面白い」と感じていること、また「難しい」と感じている項目であっても「面白い」と感じていることである。難易度のバランスを取りながら、達成感が感じられる中級文法の教育の実践のための一つの手がかりが得られるのではないかと思われる。

2.2　テスト結果

1学期修了時に、教科書の内容や教室で行った活動の成果を確認するために、アチーブメントテストを実施した。J511、J611、J711ともに、Part 1 ～Part 4 の四種類の問題形式で出題しており、詳細は表2の通りである。

表2　中級文法クラスのアチーブメントテストの出題形式

	出題形式	ねらい
Part 1	四択問題	基本的な文法の概念について理解できているかを問う。
Part 2	活用、助詞等	各文法項目の活用等の形を適切に作れるかを問う。
Part 3	文作り（文完成）	前後の文脈から空欄に入る適切な表現を作成する。
Part 4	間違い探し	文の中から誤用を見つけ、正しく書き直す。

期末テストを実施した後、以下の方法で結果を分析した。出題したすべての問題の正答率を計算し、正答率が70％以下の問題数を数えた。70％という数字は、授業実施後、各問題について7割の学生が正答できている場合、目標を達成できたと考えて設定した。そして、さらに課ごとの平均を出した。ある特定の問題だけが答えにくくて正答率を下げてしまった場合、その極端な数字を理由に「できない」と判断することを避けるためである。ここまでの方法はJ511、J611、J711の3レベルとも同じである。

一方、各課の平均正答率に対する評価はJ511、J611、J711の3レベルで異なる基準を設けて判断した。J511からJ711へと学習の進行に合わせて、平均正答率が高くなることを期待し、期末テストの平均正答率から評価基準を設定した。[4]

以下、J511の各学習項目とテスト結果の正答率、評価について分析した結果を表3に記す。

表３　J511テストの平均正答率と評価

課	平均正答率（％）	正答率70％以下の問題数／全問題数	評価
L１	75.6	3／8	普通
L２	85.7	0／8	できている
L３	68.5	5／11	できていない
L４	69.7	3／8	できていない
L５	74.3	2／3	普通
L６	69.5	4／6	できていない
L７	81.8	2／7	できている
L８	66.3	4／9	できていない

以上の結果を達成度で分けると、以下の通りである。

テスト結果	できている	普通	できていない
課	L２、L７	L１、L５	L３、L４、L６、L８

２課の「助詞」、７課の「いく・くる」は簡単だと感じていて、正答率も高かった。その反面、３課「複合助詞」、４課「の・こと・もの」、６課「目的・可能・願望」、８課「する・なる」は難しかったと感じていて、テストの結果も正答率が低く、学習者の理解度に関する意識がそのまま結果に現れていた。以下、正答率の低かった学習項目の中で「複合助詞」「する・なる」の例をあげる。

Part 1
20. 小さい頃は体が弱くてよく風邪をひいていたのですが、ジョギングを始めてから、風邪を（　　）。
①ひけなくなりました　　②ひけないようになりました
③ひかなくなりました　　④ひかないようになりました

この問題は状態の変化を表す「ようになる」の前に否定表現を接続するときの形を問う問題である。誤用が多く見られる項目であるため、教科書にも詳細に説明されており、練習問題、間違い探し等の活動でも繰り返し確認した内容である。正答は「③ひかなくなりました」であるが、「④ひかないようになりました」という誤答が13例も見られ、中級初期レベルでは難易度の高い項目であることが分かる。

次に、複合助詞の問題を例にあげる。

Part 2
※次の［　　］の中からことばを選んで書いてください。１つのことばは１回だけ使えます。
４．株式会社クロース・マーケティングが、今年５月に大都市の住人（　　）行った調査によると、日本人回答者の46％がすべての収入を配偶者に渡していると答えています。

この問題の正答は「に対して」であるが、誤答例としては「について」と「に対する」が９例ずつ現れた。複合助詞の意味や使い分け、接続については学習者自身もかなり意識して学習に取り組んでいるが、定着が難しく学習者の混乱が結果にも現れていた。

一方、正答率の高い学習項目に「助詞」が入っていることは注目すべき結果である。特に、以下にあげる例は教室活動では誤答が多く見られたが、繰り返し学習したことによって、テストの結果では92.6％の正答率を示した。

Part 1
９．あそこ（　　）座っている人は木村さんですか。
①に　　②で　　③から　　④を

助詞の使い分けは中級のみならず上級学習者も苦手意識を持っている項目であるが、助詞に関する問題の平均正答率が約86％であり、学習者自身も簡単だったと感じていることから、学習効果が現れた項目であると言えるだろう。

以上のように、中級初期レベルでは、学習者が難しいと感じている項目についてはテストの正答率が低く、学習者自身の内省や意識が的確であったと言える。J511で取り上げている項目の中で初級レベルから学習を繰り返し学習している項目は徐々に定着してきており、間違いも減ってきていた。

2．3　学習者の意識とテストの結果の比較

J511では、難しいと感じている学習者の内省がテスト結果に反映されていた。アンケートの結果とテストの結果を表４にまとめる。

表４　J511のアンケート結果とテスト結果のギャップ

課	アンケート結果	テスト結果	ギャップ
L1	簡単	普通	↘（内省より悪）
L2	簡単	できている	→（その通り）
L3	難しい	できていない	→（その通り）
L4	難しい	できていない	→（その通り）
L5	難しい	普通	↗（内省より良）
L6	難しい	できていない	→（その通り）
L7	簡単	できている	→（その通り）
L8	難しい	できていない	→（その通り）

学習者が難しいと感じていた項目の中で、３課「複合助詞」４課「の・こと・もの」、６課「目的・可能・願望」、８課「する・なる」の４項目は平均正答率が70％以下であり、難しい項目と言える。一方、１課の「指示語」は簡単だと思っているがテスト結果は普通、５課の「原因・理由」は難しいと思っているがテスト結果は普通であり、学習者の理解度に対する内省とテスト結果が一致していなかった。「指示語」は初級の早い段階で学習する項目であるが、文脈指示語および疑問詞の選択等は間違いが多く見られた。５課の「原因・理由」では「から・ので・て」の使い分けや使用制限等、学習内容が深くなり、難しいと感じていたようだが、テスト結果は普通で学習者の内省とギャップがあった。

３．中級前期レベル文法J611

本章では、J611レベルにプレースされた39名のアンケート結果、期末テスト結果について分析する。まず、アンケートから、学習者が各課の難易をどう捉えたかを見る。次に、それを期末テストの結果と比較し分析する。

3.1　学習者の意識

中級前期レベルJ611で学習した項目の中で、「難しかった」、「簡単だった」、「面白かった」と選んだ項目について、各課が全体に占める割合を表５に記す。

表５　J611の学習項目に対する学習者の意識

学習項目	難しかった課	簡単だった課	面白かった課
L９　テ形と否定形	3（ 3％）	30（26％）	11（10％）
L10　並列	12（10％）	17（15％）	14（12％）
L11　名詞修飾	2（ 2％）	25（22％）	9（ 8％）
L12　時の表現	11（ 9％）	15（13％）	14（12％）
L13　仮定表現	22（19％）	4（ 3％）	19（16％）
L14　複合動詞	33（28％）	4（ 3％）	19（16％）
L15　自・他動詞	19（16％）	8（ 7％）	20（17％）
L16　状態・結果	15（13％）	13（11％）	11（ 9％）

数字は回答者数、（　）は％

上記の結果から、各課を「簡単」、「普通」、「難しかった」の３つに分類したものが、以下である。

簡単	普通	難しかった
L９、L11	L10、L12、L16	L13、L14、L15

簡単だと答えた学習者が、難しいと答えた学習者よりも大幅に多いのは、９課「テ形と否定形」、11課「名詞修飾」であり、どちらも初級で既習の項目である。９課「テ形と否定形」では、「ないで」「なくて」の混同、11課「名詞修飾」では名詞を修飾する部分の接続の形等、誤用の多い項目であるが、どちらの課も文法の概念は比較的整理しやすいため、易しいと捉えられてしまう可能性がある。しかし、特に11課の名詞修飾は文作り等産出レベルでの誤用が多く、「できているつもり」になってしまいがちなので、安易に「簡単だ」と感じさせないような工夫が必要である。また、これらの課は「面白い」と感じている学習者数も平均より少ないことから、文法項目についての気づきや発見を十分に促せていない可能性もある。

簡単だと答えた学習者と、難しいと答えた学習者がほぼ同程度で、「普通」に分類されたのは、10課「並列」、12課「時の表現」、16課「状態・結果」である。学習者によって、文法の概念が分かったから簡単だと答えたか、文作り等産出レベルからみて難しいと答えたか、捉え方の違いによって差が出てきたとも考えられる。また、学習者間にレベルの差が存在することも、このような意識の違いが生じた要因であろう。

そして、難しいと答えた学習者が、簡単だと答えた学習者よりも大幅に多く、「難しかった」に分類されたのは、13課「仮定表現」、14課「複合動詞」、15課「自動詞と他動詞」で

ある。「難しかった」に分類された課は、面白かった課の上位3つに該当することから、学習者にとって難しさはマイナスのものではなく、チャレンジできる項目として捉えられていることがうかがえる。本教材では既習の文法項目であっても、その概念や産出レベルで間違いやすい点を明確に提示しているため、学習者は「できたつもり」になることなく、難しい項目にもしっかり取り組めたと考えられる。

3.2　テスト結果

表6は、各課の問題の平均正答率と、正答率が70％以下であった問題数を示している。J611では、80％以上を「できている」、75％～79％の課を「普通」、74％以下を「できていない」と判断した。概ね「できている」と言えるのは、9課、12課、15課である。また、「普通」に分類されるのは、13課、16課であり、正答率が低く「できていない」と言えるのは、10課、11課、14課である。

表6　J611テストの平均正答率と評価

課	平均正答率（％）	正答率70％以下の問題数／全問題数	評価
L9　テ形と否定形	80.1	1／9	できている
L10　並列	70.1	4／10	できていない
L11　名詞修飾	73.8	3／7	できていない
L12　時の表現	80.0	1／6	できている
L13　仮定表現	77.2	1／10	普通
L14　複合動詞	67.5	3／6	できていない
L15　自・他動詞	81.1	2／8	できている
L16　状態・結果	79.2	2／9	普通

正答率の低かった問題から、誤用の傾向について見ていきたい。まず、「できている」課で多く見られたのが、基本的な活用等のミスである。例えば、「できている」に分類されている第9課においても、四択問題で次のような誤用が見られた。

Part 1

20．A：傘、持ってないの？
　　B：うん、出かけるときは、いい天気だったから（　　）来ちゃった。
　　a 持たないで　b 持って　c 持たなくて　d 持てないで

正答はaであるが、ほかの答えを選択した20名の内訳は、d＝14名、c＝5名、b＝1名である。つまり、「ないで」「なくて」の用法の違いは理解していながら、活用を間違えてしまう学習者が多いということになる。このように、中級前期のJ611であっても、初歩的なミスが多くみられることを念頭におき、適宜学習者に注意を促していく必要がある。

また、正答率の低い問題には、文法の基本的な用法の理解が不十分なものも多かった。以下に第11課のPart 3 の問題を提示する。

Part 3

6．コンサートの会場には＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿人しか入れません。

模範解答は「チケットを持っている」などであり、名詞修飾の形で産出できるかを問うものである。誤用が見られたのは39名中15名であったが、そのうち、「チケットをもつ」「コンサートを管理するの」など、文法項目の基本的な概念の理解が不十分な学習者が6名で、その他は、語彙や意味的な間違いあった。このような誤用を見ても、名詞修飾のような基本的な文法項目がしっかりと定着していない学習者がいることが分かる。

3．3　学習者の意識とテスト結果の比較

ここでは、アンケート結果とテスト結果の両者を比較し、学習者の意識と実際のテスト結果とのずれについて考察する。表7に両者を比較した結果を示す。

表7　J611のアンケート結果とテスト結果のギャップ

課	アンケート結果	テスト結果	ギャップ
L9	簡単	できている	→（その通り）
L10	普通	できていない	↘（内省より悪）
L11	簡単	できていない	↘（内省より悪）
L12	普通	できている	↗（内省より良）
L13	難しい	普通	↗（内省より良）
L14	難しい	できていない	→（その通り）
L15	難しい	できている	↗（内省より良）
L16	普通	普通	→（その通り）

学習者の意識よりも実際の結果が悪い課は、11課「名詞修飾」と10課「並列」であった。どちらも四択問題等の基本から、文作り等産出レベルの問題まで誤用が見られた。これら

の課では初級で目にした項目が扱われているためか、「できているつもり」になっていることがうかがえる。基本的な用法の理解はもちろん、産出レベルでの間違いやすさについて十分に意識されていないことも、正答率の低下につながったのではないかと考えられる。

次に、学習者の意識と実際の結果がある程度一致している課に該当するのは、9課「テ形と否定形」、16課「状態・結果」、14課「複合動詞」であった。9課は、できていると思ってその通りという結果であった。扱う項目は、「なくて・ないで」の混同等間違いやすい項目ではあるが、活用ミスはあるものの概念を整理し、学習者への意識づけを行ったことにより、テストでの誤用は比較的少なかった。この課はJ611の授業で最初に扱われているため、この課で理解度を高めることによって学習者に自信を持たせる効果も期待できる。

また、16課は普通だと思っていてその通りという結果であった。この課は「状態・結果」を表す「自動詞＋ている」や「他動詞＋てある」が扱われており、15課の「自・他動詞」がしっかりと身についていなければ、理解が難しい。16課が「難しい」と意識されず、結果が「普通」となったことからも、学習者は15課の内容を身に付けて、16課に進んでいることがうかがえる。

一方、14課「複合動詞」はできていないと思っていて、その通りという結果になっている。この結果を2011年度3学期のJ611の授業評価アンケートと比較してみると、「複合動詞」を扱った課について「難しかった」と答えた学習者は全体の14％にとどまっており、今回「難しかった」という学習者が約2倍に増えていることが分かる。その理由としては、教科書の難易度が高すぎたことが考えられる。2012年度に使用した改訂版の教科書には、より詳しい説明を目指して学習者の理解できる範囲を超えた内容を盛り込んだため、混乱を招いたことが予想される。また、応用力が必要な項目であり、微妙なニュアンスの理解が必要であるため、定着が難しいと思われる。今後の課題として、基本的な部分や要点をより明確にした教材の作成や授業の工夫が必要となってくるだろう。

学習者の意識よりも実際の結果がよい課は、15課「自・他動詞」、12課「時の表現」、13課「仮定表現」である。宮崎他（2012）でも、これらの課は「難しかった」と答えた学習者が多く、以前から難しいということは指摘されていた。そのため、15課に入る前に自・他動詞の語彙リストを予習プリントとして配布し、Moodleに答えを載せるなどの対策をとった。また、自・他動詞の問題は、9課～16課の中でたびたび出題されており、これにより学習者の意識が高まり、より集中して取り組んだとも推測できる。つまりこれらの課は、学習者の「気づき」を促し、それがある程度結果として現れた課であると言えよう。

今回のアンケートとテスト結果との比較から見えてきたことは、学習者に「気づき」を促すことがいかに重要であるかということである。テスト結果が悪く、「できていない」に分類された課は、学習者の意識が低いものが多いことからも、このような意識が文法を身につけるうえで大切であることが分かる。そのためにも、「できているつもり」ではな

く、適切に産出できるようになることが最も大切であると、教師・学習者ともに意識していくべきであろう。そのためにも、間違えやすい文法項目を避けるのではなく、敢えてそこに焦点を当てて学習者の「気づき」を促すことが必要になってくるであろう。そのような「気づき」を促せる指導や教材は、授業への学習者の満足感や達成感にもつながっていくと考えられる。

４．中級中期レベル文法J711

本章では、2012年度１学期にJ711レベルにプレースされた44名のアンケート結果、期末テスト結果を分析の対象とする。まず、学習者が各課に対して抱いた感想からその項目の難易をどう捉えていたかを見る。次に、期末テストの結果と照らして分析する。

4.1　学習者の意識

始めに分析するのは、学習者が「難しかった」「簡単だった」「面白かった」と答えた結果である（表８）。この結果からは、学習者の文法項目に対する意識が見て取れるだろう。

表８　J711の学習項目に対する学習者の意識

学習項目	難しかった課	簡単だった課	面白かった課
L17　敬語（特別な形）	15（12％）	17（14％）	14（12％）
L18　敬語（規則的な形）	12（10％）	22（18％）	16（13％）
L19　推量・伝聞	26（22％）	6（ 5％）	28（23％）
L20　判断・義務	17（14％）	16（13％）	16（13％）
L21　否定表現	14（12％）	13（11％）	13（11％）
L22　授受表現	4（ 3％）	20（17％）	11（ 9％）
L23　受身	5（ 4％）	20(17％）	7（ 6％）
L24　使役・使役受身	28（23％）	6（ 5％）	16（13％）

数字は回答者数、（　）は％

アンケート結果から、17課～24課を３つに分けることができる。１つは、難しさ、面白さともに同じような数値を示しているもの、２つ目は簡単で面白さが感じられないと思われているもの、３つ目は難しいが面白いと思われているものである。

まず、１つ目は「難しい課」「簡単な課」で、割合に差がないものがあるが、難しいとも簡単だとも思われているものである。さらに、「面白かった課」も同じような数値である。17課の「敬語（特別な形）」、20課の「判断・義務」、21課の「否定表現」がそれに当たる。これらはどの部分を頭において回答しているかによって違いが出てくると思われる。例え

ば、17課で言えば、特別な敬語動詞を覚えるのが大変、どんな場面で使えば適切なのかが分からない、という点に着目すれば「難しい」という感想になり、覚えさえすればいい、選択問題ならできる、と思えば「簡単」という感想になるだろう。あるいは、難しいか簡単かで意見が割れるほど、中級レベルに在籍する学習者には既有知識に差があると考えることもできる。いずれにしても、これらの 3 つの課については、「面白かった課」も同じくらいの数値となっている。これらの 3 つの課は、 3 つの設問で同じような数値を得たが、それぞれを他の文法項目の結果と比べると「難しい」「簡単」「面白い」ともにすべて普通より若干高めの数値と言えることから、難しくもなく簡単すぎもせず、勉強になったと感じるような、平均的な位置にある項目だと思われる。

次に、18課の「敬語（規則的な形)」、22課の「授受表現」、23課の「受身」を見ていく。これらの 3 つは、「簡単だ」と思う人が多かったものである。その中でも18課は「面白い」の項目で高めの数値を得たが、22課、23課は「面白い」の数値が低めで「簡単で手ごたえがなかった」と思われているようである。実際に、それほど簡単なのであれば、間違いも少なく、適切に運用できているはずである。また、中級中期のレベルで再度取り上げる必要もないのかもしれない。それについては慎重に検討する必要がある。

最後に、「難しい」と答えた人が多かった19課の「推量・伝聞」、24課の「使役・使役受身」である。この 2 つは難しさの観点では他の項目を引き離して 1・2 番である。それを表しているのが簡単だと思った人が少ないことであり、ちょうど裏返しの結果になっている。つまり、学習者のほとんどが一様に難しいと考えているのである。しかし、面白かったと答えた人も多い。特に19課は面白さの点でも他の項目を引き離している。この結果からは、難しいがそれだけ身になったものも多く、新しい知識が学べたと手ごたえを感じていると思われる。

以上の結果をまとめると、以下のようになる。

簡単	普通	難しい
L18、L22、L23	L17、L20、L21	L19、L24

4. 2　テスト結果

以下の表 9 には、課の平均正答率と、個別の問題で正答率が70％以下だったものの数を示しており、この課の到達目標をクリアしたかどうかを評価した結果を示した。

まず17課を例に見てみると、17課から出題したのは 5 問であり、その 5 問の平均正答率は87.6％であった。その 5 問の中でも正答率が70％以下であり出来がよくなかったものは 1 問であった。正答率の低い問題が少なく、平均正答率が高いことから、17課については学習ができたと判断した。以下の18課～24課についても同様に捉え、多くの人が正答でき

た課は、17課、19課、21課、22課である。それ以外の18課、20課、23課、24課は難しいと判断した。711レベルでは、期末テストの平均点が高く概ねよくできていたので、そこから考えて80％以上を「できている」79％以下を「できていない」と判断した。

表９　J711テストの平均正答率と評価

課	平均正答率（％）	正答率70％以下の問題数／全問題数	評価
L17　敬語（特別な形）	87.6	1／5	できている
L18　敬語（規則的な形）	78.8	2／6	できていない
L19　推量・伝聞	83.5	2／11	できている
L20　判断・義務	78.9	6／12	できていない
L21　否定表現	82.1	2／7	できている
L22　授受表現	89.7	0／6	できている
L23　受身	78.0	1／6	できていない
L24　使役・使役受身	76.9	3／7	できていない

これを「できている」「できていない」の２つに分けて示すと、下のようになる。

テスト結果	できている	できていない
課	L17、L19、L21、L22	L18、L20、L23、L24

この結果は、4.1で見た学習者の感想とは、ずれがみられた。簡単あるいは普通だと思っていても実際は正答できていないものが３課分（18課、20課、23課）、普通あるいは難しいと思っていても正答できているというものが３課分（17課、19課、21課）あった。このずれについて4.3で詳しく見ていく。

4．3　学習者の意識とテスト結果の比較

ここでは、上の結果を踏まえ、学習者に難しさについて聞いたアンケート結果とテストの結果を照らし合わせる。それをまとめたものが以下の表10である。学習者自身の感想とテスト結果が一致しているのは、簡単だと答えテスト結果もよかった22課「授受表現」と、難しいと答えテスト結果も思わしくなかった24課「使役・使役受身」だけである。18課、23課は簡単、20課は普通だと思っていてテストもできていない、17課、21課は普通、19課は難しいと思っているがテストではできていたものである。

表10　J711のアンケート結果とテスト結果のギャップ

課	アンケート結果	テスト結果	ギャップ
L17	普通	できている	↗（内省より良）
L18	簡単	できていない	↘（内省より悪）
L19	難しい	できている	↗（内省より良）
L20	普通	できていない	↘（内省より悪）
L21	普通	できている	↗（内省より良）
L22	簡単	できている	→（その通り）
L23	簡単	できていない	↘（意識より悪）
L24	難しい	できていない	→（その通り）

まず、思ったより結果が伴わなかったもの（18課、20課、23課）について分析する。18課は「規則的な敬語」である。パターン化できるものは一つひとつ覚える必要がないため油断しがちだが、尊敬か謙譲かを考え、それに合わせて形を変えるというのは使い慣れないうちは難しいだろう。17課の「特別な敬語」はできていることから、規則を覚えさえすればどの動詞にもあてはまるということがかえってマイナスに働いたのかもしれない。20課は「判断・義務」である。ここで取り上げたのは「かもしれない」「だろう」「に違いない」「はずだ」「べきだ」「なければならない」だが、このうちほとんどは既習であるためできると思いこんでしまい、特に注意すべき「はずだ」「べきだ」について注意が行き届かなかった可能性がある。ここでは例えば以下のような間違いが見られた。

Part 1
7．私は自分(じぶん)のやりたいことではなく、やる（　　）ことを考(かんが)えてやっていこうと思います。
① べき　② べきだ　③ べきの　④ べきな

これは、「べき」が名詞に連なる場合の形を問う問題である。答えは①であるが、誤答を選んだのは16人で、うち、③＝７人、④＝９人であった（②を選んだ人はゼロ）。「べきな」「べきの」というように名詞に連なる典型的な形を選んで間違っている学習者が多い。

23課は「受身」である。受身の問題は使役、使役受身との間違いが多かった。それ以外にも受身を使うということは分かっても、正確さに欠ける間違いが多く見られた。例えば以下のような問題である。

Part 2
問題14　日本は周(まわ)りを海(うみ)に（　　）ている。

この問題は、「囲む」という動詞を使うことが分かっているか、受身を使うということが分かるか、これらが分かった上で正確に活用できるか、この3つがポイントとなる。この問題の間違いで一番多かったのは「囲む」の活用間違いであった。「囲む」を使うということが分かっても、受身にできない（「囲って」「囲まって」）、受身形が正確でない（「囲られ」「囲れ」「かこまられ」）ものが、誤答のうち59％にのぼった。

次に、思ったよりできた問題（17課、19課、21課）について分析する。17課は「特別な敬語」で、敬語動詞を覚えることが必要である。それは一つひとつ覚えなければならないため、意識して覚えたと思われる。1問だけ正答率が低かった問題は、「お目にかかる」と答えるものだったが、「お目にかける」「ご覧になる」「拝見する」「ご覧にいれる」など類似表現との混同が見られ、難しかったと思われる。

19課は「推量・伝聞」で、「ようだ」「そうだ」「らしい」の区別が難しい課である。これは、授業の前に予習として課している宿題の結果を見ても間違いが多く、確かに難しいことが見て取れる。しかし、テストの結果は予想よりよくできていた。できなかった3問（11問中）は、やはりできるようになるまでには時間が必要だと思われるが、その他の問題は学習者自身に難しいという苦手意識がありながらできるようになっているところを見ると、難しいことにチャレンジすることは学習意欲につながるのではないかと思われる。この課は「面白かった課」で一番割合の高かった課であるが、難しいことに取り組み、少しでも分かるようになってきた喜びが表れた結果ではないだろうか。

21課は「否定表現」で、「とは言えない」「とは限らない」「ことはない」「ないことはない」を扱っている。この課も「ない」が1つの場合と2つの場合で意味が反対になることや、「とは限らない」と言った場合、少ない可能性に注目するということが分かっていないと意味が不自然になってしまう。そのような注意点を確認しても授業中に間違いが多くみられた。それにも関わらずテストで結果を残しているところを見ると、学習者にとっても、また教師にとってもやりがいのある課だと思われる。

アンケート調査の結果と期末テストの結果を比較すると、学習者の意識と実際の結果に隔たりがあることが見て取れた。特に、簡単だと思っているが、実際にはできていないというのは問題である。自分は分かっていると思い込んでいるために、基本的な間違いに気づかないこともあるだろう。このことに気づかないと、問題意識も持たず不完全なまま進んでしまうことになるため、「実はできていないのだから注意しなければならない」ということに気づかせることが大切である。この思い込みが文法の習得を妨げている可能性も

否定できない。

難しいと思っているが実際はできているというのは、提示や説明の仕方次第で学習効果はあるということが言えるだろう。使用している教材『実用日本語文法』の特徴である、どんな場面で使うのか、どうしてそれが使えるのかということの説明、類似表現との使い分けが詳しく解説されていることなどは中級中期の711レベルで学ぶ学習者が望んでいる内容であることが分かった。習得しにくい項目は、難しいから省くという考えではなく、学習者の望んでいるものを提供していくことが大切だろう。

5．中級文法に対する評価

本章では、中級文法クラスを受講した学生のアンケート調査の結果から、授業内容に関する設問の⑴⑶⑼を取り上げ、授業評価について見ていく。設問の内容と結果を表11に記す。回答の結果は「まあまあそう思う」「とてもそう思う」を合わせた割合である。

表11　中級文法クラスに対する学習者の授業評価

	J511	J611	J711
⑴ 日本語が上達したと感じるか	83	90	93
⑶ 教科書で勉強したいことが勉強できたか	91	95	100
⑼ 授業の満足度	80	76	90

（数字は％）

これらの設問において、J511、J611、J711いずれも高い数値が得られた。⑴ 日本語が上達したと感じるか、は主観的なことであるため本当に上達したかどうかを言いきることはできないが、伸び悩みを感じることが多い中級レベルで、学習者自身が実感を持つことができたという点では成功だと言える。

特に、⑶ この教科書で勉強したいことが勉強できたか、については 3 つのレベルともに90％以上の学習者が勉強できたと答えている。このことから、既習だからといって、やる気がないということもなく、簡単だから、もう知っているからやる必要はないと考えているわけでもないということが分かる。さらに、難しいからといって回避するわけでもない。むしろ難しいものにチャレンジしてできるようになる喜びを感じてこそ満足度にもつながるのだろう。⑼ 授業の満足度の高い数値からも、それがうかがえる。

コミュニケーションを重視した文法教育を考える際に、学習者にとって難しい項目、定着しにくい項目、使用頻度の少ない項目は省くという考えもある（野田2012）が、学習者のレベルに合った内容に工夫して提示すれば学習者はむしろ正面からしっかり取り組むようになるのではないだろうか。同じ機能を持つ類似表現の使い分け等が難しいからといっ

てそれを省くのでは不完全なままである。白川（2005：44）に述べられているように、「学習者の視点から」教える文法項目や内容を見直し、学習者のニーズに合った学習内容を提示することによって、より難易度の高い項目にも意欲的に取り組めるようになるだろう。また、誤用や非用を防ぐための文法説明や練習も必要であろう。

中級レベルは初級と比べて学習者自身が日本語力の向上を実感しにくいと言われているが、学習者のニーズに合った学習内容を工夫することによって、「できるようになった」と実感できるような授業を提供したいものである。

6．おわりに

本研究では中級レベルの学習者を対象として行った文法クラスの実践を通して、学習者は文法クラスに対してどのようなニーズを持っているのか、正確さを高め運用力を向上させるためにはどのような文法教育が必要なのか、中級レベルで学習者の意識と学んできた文法知識はどのように現れるのか、について考察を行った。中級レベルでは、類似表現の使い分けやさまざまな表現のバリエーションなどに戸惑う学習者も少なくない。学習しても上達したと実感しにくく、運用力がつくまで時間がかかるためであろう。

本稿では学習者自身が難しいと感じる項目であっても、「面白かった」「学びたいことが学べた」と感じる学習者が多く、積極的に文法項目の学習に取り組む学習者のほうが圧倒的に多かったことが明らかになった。つまり、学習者の日本語レベルが上がるにつれてさらに難しいと感じる学習項目に意欲を示し、チャレンジしていることが分かった。そのチャレンジこそが学習の達成感や満足度につながり、学習を持続させる原動力になるだろう。

中上級レベルに上がり、使い分けが難しく混乱が多い学習内容は多くなるが、だからといってそれらの項目を回避し、教えないというのは学習者のニーズにも適合していない。学習者のニーズを的確に捉え、運用能力を向上させ、実際のコミュニケーションの場面で使用できるような説明や練習を重ねていく文法教育が必要であろう。筆者らは今後も「使える日本語の文法」教育の実現を目指していきたい。

注

1．中級文法クラスとは、筑波大学留学生センター補講コースで開講されている中上級技能別クラスの中の中級初期文法（J511）、中級前期文法（J611）、中級中期文法（J711）の3クラスを指す。同科目は受講者数が多いため、同じ授業を3回開講するトリプル開講の形態で実施している。511の受講者は45名、611は39名、711は44名が対象となっている。

2．本教材は24課で構成されており、J511では1課～8課、J611では9課～16課、J711では17課～24課を学習することになっている。開発意図等については、宮崎他（2011）、宮

崎他（2012）に詳しく述べられている。

3．各レベルで扱った内容の中で、難しかった課、簡単だった課、面白かった課について3つずつ複数回答してもらった。数字は各質問に対する回答者数と全体の中の割合を示したものである。本教材を使用した実践報告および授業評価に関する分析は鈴木他（2012）を参照されたい。

4．各レベルの対象および到達目標が異なっており、テストの得点分布も異なっていたため、それに合わせて異なる平均正答率の評価基準を設定している。J511では80％以上を「できている」、70～79％は「普通」、69％以下は「できていない」と判断した。J611では、80％以上を「できている」、75％～79％を「普通」、74％以下を「できていない」と判断した。J711では80％以上を「できている」79％以下を「できていない」と判断した。

参考文献

新井高子・斎藤ちぐさ・森田由記・山本和子（2006）「初中級教材集の開発―『文法が弱いあなたへ』に準拠して―」『留学生教育』第8号 埼玉大学留学生センター：87-92

新井高子・平田真美（2001）「聴解中心の初中級総合教科書に向けた調査研究」『留学生教育』第4号 埼玉大学留学生センター：19-28

大木隆二（1994）「中級教材の扱いとその周辺をめぐって」『九大留学生センター紀要』第6号：41-56

佐藤豊（2000）「日本語中級教科書について」『ICU日本語教育研究センター紀要』10号：1-12

白川博之（2005）「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版：43-62

鈴木秀明・榎陽子・許明子（2012）「中級レベル文法クラスの実践報告」『筑波大学留学学生センター日本語教育論集』：153-169

鶴町佳子・許明子（2008）「多人数クラスにおける多人数クラスにおける文法授業実践報告―日本語中級前期J511、J514の学習者を対象として―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第23号：41-51

中村妙子（1999）「中級日本語教育について」『ICU日本語教育研究センター紀要』9：27-36

長野ゆり・笹原幸子・寺下優子（2003）「総合日本語コース C1（初中級）クラスの開発と活動・教材開発」『金沢大学留学生センター紀要』第6号：13-30

野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

野田尚史編（2012）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版

許明子・鶴町佳子（2009）「日本語学習者のレベル観」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』、24号：19-36
宮崎恵子・二瓶知子・鈴木秀明・許明子（2011）「中級日本語文法教材『実用日本語文法1・2』の開発及び実践報告」『日本語教育方法研究会会誌』Vol.18, No.1：46-47
宮崎恵子・二瓶知子・許明子（2012）「中級日本語文法教材『実用日本語文法』の開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号：137-152

教材

許明子・宮崎恵子・二瓶知子（2011）『実用日本語文法（改訂版）』筑波大学留学生センター